

別紙標準様式（第6条関係）

会議録

会議の名称	令和5年度第1回ネクスト・ギガ・リプレイス意見聴取会
開催日時	令和5年10月11日（水） 開始時刻 15時30分 終了時刻 17時00分
開催場所	輝きプラザきらら 3階 教育委員会室
出席者	株式会社わけわけ 代表取締役社長 野中 健次 小児発達学博士 臨床心理士 山田 智子 認定特定非営利活動法人カタリバ 磯崎 大二郎 元枚方市立小学校管理職 元枚方市教育委員会プランナー 野村 明央 枚方市立東香里小学校 教頭 上田 泰丈 枚方市立開成小学校 教諭 山田 大樹 枚方市立中宮中学校 教諭 佐納 達平
欠席者	なし
案件名	1 めざす子ども像と1人1台端末の在り方について 2 その他
提出された資料等の名称	1. ネクスト・ギガ・リプレイス意見聴取会委員名簿 2. ネクスト・ギガ・リプレイス意見聴取会設置要綱 3. GIGA スクール構想の着実な推進1人1台端末更新に向けた国の動向と1人1台端末利活用の現状について 4. 「めざす子ども像と1人1台端末の在り方」について議論する際に必要な視点 5. 枚方版 ICT 教育モデル（第3版）
決定事項	<input type="checkbox"/> 「めざす子ども像と1人1台端末の在り方」について議論する際に必要な視点 <input type="checkbox"/> 次回の意見聴取会における具体的な議論内容 「誰一人取り残さない」ための「授業改善」や「家庭学習」のあり方

会議の公開、非公開の別 及び非公開の理由	公開
会議録の公表、非公表 の別及び非公表の理由	公表
傍聴者の数	1人
所管部署 (事務局)	学校教育部 学校教育室 教育研修課

審議内容

1 開会

事務局（浦谷）：それでは定刻となりましたので、ただいまから第1回ネクスト・ギガ・リプレイス意見聴取会を始めさせていただきます。

皆様方におかれましては大変お忙しい中、委員の就任並びに本意見聴取会へのご出席、誠にありがとうございます。

私、本日の司会・進行を務めさせていただきます、教育研修課の浦谷と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

本日は、初めての会議でもありますので、出席者をご紹介させていただきます。別紙1をご覧ください。上から順にお名前を読み上げさせていただきます。

まず、お一人目、野中健次さんです。

そして、山田智子さんです。

磯崎大二郎さんです。

野村明央さんです。

上田泰丈さんです。

山田大樹さんです。

佐納達平さんです。

本日は、山田委員、磯崎委員がオンラインでの出席です。

次に、事務局の紹介をいたします。

学校教育課次長の齋藤 博でございます。

事務局（齋藤）：齋藤でございます。よろしくお願いいたします。

事務局（浦谷）：教育研修課課長の植田 剛志でございます。

事務局（植田）：植田です。よろしくお願いいたします。

事務局（浦谷）：教育研修課係長の永野 雅也でございます。

事務局（永野）：永野です。よろしくお願いいたします。

事務局（浦谷）：教育研修課主任の石本 秀二でございます。

事務局（石本）：石本です。よろしくお願いいたします。

事務局（浦谷）：教育研修課の伊東 和孝でございます。

事務局（伊東）：伊東です。よろしくお願いいたします。

事務局（浦谷）：教育研修課の山城 永倫美でございます。

事務局（山城）：山城です。よろしくお願いいたします。

事務局（浦谷）：そして私、教育研修課の浦谷 亮佑でございます。どうぞよろしくお願いいたします。それでは、会議に先立ちまして、学校教育課 次長の齋藤から、ご挨拶申し上げます。

事務局（齋藤）：失礼します。みなさまにおかれましては、日頃は児童・生徒の健やかな成長のためにご尽力いただいておりますことをこの場をお借りしまして感謝を申し上げます。大変にありがとうございます。

みなさんもお存じのとおり、令和5年6月16日に閣議決定されました「教育振興基本計画」におきましては、「GIGAスクール構想について、次のフェーズに向けて周辺環境整備を含め、ICTの利活用を日常化させ、誰一人取り残されない教育の一層の推進や情報活用能力の育成など学びの変革、校務改善につなげるため、国策として推進するGIGAスクール構想の1人1台端末について、公教育の必須ツールとして、更新を着実に進める。」と明記されました。この基本計画に則りまして、本意見聴取会では、枚方市の児童及び生徒に貸与している1人1台端末の更新、その他学校教育における情報化の推進のための施策についてご意見をいただきたいと思っております。本日は、限られた時間ではございますが、様々な観点から、活発なご意見をいただくことをお願いしまして、はなはだ簡単ではございますが、挨拶とさせていただきます。本日はどうぞよろしくお願ひいたします。

事務局（浦谷）：ありがとうございます。冒頭に申し上げましたとおり、本日は初めて開催する会議ですので、議事の進行につきまして、しばらくは私のほうで進めさせていただきます。まず、本日の資料の確認をさせていただきます。

本日の資料は

- ・次第
- ・【別紙1】ネクスト・ギガ・リプレイス意見聴取会委員名簿
- ・【別紙2】ネクスト・ギガ・リプレイス意見聴取会設置要綱
- ・【別紙3】「GIGAスクール構想の着実な推進～1人1台端末の更新～」に向けた国の動向と本市の1人1台端末活用の現状について
- ・【別紙4】「めざす子ども像と1人1台端末の在り方」について議論する際に必要な視点
- ・【参考資料1】枚方版ICT教育モデル（第3版）

を資料として送付をさせていただいております。

なお、委員の皆様におかれましては事前にデータでお送りをさせていただいております。また本日会場にご参集頂いております委員の皆様には参考資料の枚方版ICT教育モデル紙資料としても配付をさせていただいております。よろしくお願ひします。

過不足等ございませんでしょうか。

それでは、次第をご覧ください。

本日は、報告2件、案件1件を挙げさせていただいております。

会議を始めるにあたり、本会議体の設置目的及び本会議における座長について、ご説明させていただきます。

別紙2「ネクスト・ギガ・リプレイス意見聴取会設置要綱」をご覧ください

い。

本意見聴取会につきましては、第1条にありますように、令和7年度からの児童及び生徒に貸与している学習用端末の更新その他学校教育における情報化の推進のための施策に関し、情報通信技術及び情報教育の関係者の意見を聴取するための会議体でございます。また、第5条に進行方法に関する規定があり、第2項には、「聴取会には、座長等を置かないものとする。ただし、聴取会の円滑な進行を図るために必要があるときは、この限りでない。」とあります。

今後、本会議の円滑な進行を図るため、座長を置きたいと考えております。座長には、本市の1人1台端末利活用及び教職員研修等にご尽力いただいております、株式会社わけわけ 代表取締役社長の野中 健次さんをお願いしたいと思いますが、皆様いかがでしょうか。よろしければ拍手をもって承認いただきたいと思います。

(拍手)

ありがとうございます。

それでは、今後の座長は野中委員をお願いいたします。

それでは野中さん、一言ご挨拶をお願いいたします。

座長(野中委員)：この度、座長を務めさせていただくことになりました株式会社わけわけの野中と申します。みなさん、よろしく願いいたします。私はGIGAスクール構想が始まった時から枚方市及び熊本市、池田市後は交野市のICTのアドバイザーとしていろいろとお手伝いをしております。そういった流れの中で、GIGAスクール構想における枚方市の取組での良いところだけではなく、課題もみなさんと一緒に話し合いながら本当に理想の教育を体現していくためにICTをどのように活用していくのか、活用だけではなくてどのように整備していくのかも含めてみなさんと一緒に話を深めていけたらと思っておりますので、みなさんのお立場から見ている世界を教えていただけたら、と思っております。今日はどうぞよろしく願いいたします。

事務局(浦谷)：ありがとうございます。

それでは、ここからの進行は野中座長をお願いしたいと思います。

どうぞよろしく願いいたします

座長(野中委員)：それでは、ただ今より会議を始め、私が進行をしてまいります。皆様どうかお力添えいただきますよう、よろしく願いいたします。また、皆様には、案件について、それぞれのお立場から、活発なご意見をお願いしておきます。

次に、事務局から傍聴者の報告を求めます。

事務局(浦谷)：本日の傍聴希望者ですが、オンライン視聴を含め、1名でございます。

座長(野中委員)：ありがとうございます。

次に、本会議の公開について、傍聴者への資料の配付、事務局から説明をお願いします。

事務局（浦谷）：枚方市審議会等の会議の公開等に関する規程第3条に基づき、本会議は公開となっています。また、本会議は公開とするとともに、会議録についても公表とし、発言された委員の氏名を公開することになります。

また、配付資料については、傍聴者の閲覧に供するか、配付するよう努めることになっております。今回の会議に関しましては、非公開情報が含まれていないと考えられますので、資料に関して、傍聴者に配付をしております。

座長（野中委員）：ありがとうございます。

では、報告1に入ります。「報告1 GIGA スクール構想の着実な推進～1人1台端末の更新～に向けた国の動向と本市の1人1台端末活用の現状」について事務局から説明をお願いします。

事務局（浦谷）：それでは、事務局より報告1の説明をさせていただきます。

【別紙3】をご覧ください。

まずは、GIGA スクール構想の始まりとして、令和元年（2019年）の学校におけるICT利活用の現状について説明いたします。

資料の右下にページ番号を振っております。

2ページをご覧ください。

平成31年3月時点「学校における教育の情報化に関する調査」では、学校のICT環境整備状況が脆弱であり、地域間での整備状況に大きな格差があることが報告されました。また、OECD加盟国の中で、日本の学校の授業におけるデジタル機器の使用時間は最下位でした。学校外でのICT利用については、日本の場合「ネット上でのチャット利用」や「1人用ゲームで遊ぶ」が最も多い現状でした。

3ページをご覧ください。

そういった背景も踏まえ、国の主導によりGIGAスクール構想の実現に向けた環境整備が始まりました。

4ページをご覧ください。

環境整備のキーワードとしては、「すぐにでも」「どの教科でも」「誰でも」使えるICTとしております。活用例といたしましては、例えば、子どもたちが課題解決に必要な情報を収集、整理したり、共同編集で、複数人で同時に資料作成をしたりすることです。

1人1台端末を活用して、教科の学びを深め、教科の学びの本質に迫ることをめざします。そして、教科の学びをつなぎ、社会課題の解決に生かす探究的な学びをめざしています。

5ページをご覧ください。

これらのことから、GIGA スクール構想では、これまでの教育実践の蓄積と ICT とを掛け合わせることで、学習活動を一層充実させ、主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善をめざしています。

6 ページをご覧ください。

本市におきましても、令和 2 年度中に、児童生徒及び教職員への 1 人 1 台端末の整備を完了しました。また、校内ネットワークの整備や授業での活用に必要な ICT 機器の整備も行いました。

1 人 1 台端末については、5 年のリース契約のため、令和 7 年より順次、端末の更新が必要となります。

本市では、1 人 1 台端末を活用して、学習や校務で活用されております。授業では、端末を活用することで授業の在り方が大きく変わりました。これまで教員が一斉に授業を行っていた場面から、子どもたちが自分のペースに合わせて必要なツールを活用して学びを進める場面が増えました。家庭に帰っても、他の子どもたちの作品を、端末を通して確認してコメントを残せたり、先生に課題をデータ送信したりすることができるようになりました。また、デジタルドリルを活用することで、AI が自動採点し、一人ひとりに最適な問題を提案してくれます。

7 ページをご覧ください。

校務では、子どもたちや保護者への連絡もデジタルでやり取りを行っています。また、これまで紙で行っていたアンケートなどもデジタルを使うことで実施から集約までの一連の流れを全て自動で行っています。

職員会議でも、議事録や資料編集を複数人で同時に行い、校務の効率化につながっています。

8 ページをご覧ください。

1 人 1 台端末については、5 年のリース契約のため、令和 7 年より順次、端末の更新が必要となります。

先日、国からは令和 6 年度概算要求資料が発表されました。その中で「GIGA スクール構想の着実な推進～1 人 1 台端末の更新～」として約 148 億円の要求がなされました。

事業のスキームとしては、都道府県、市町村が、児童生徒が使用する PC 端末を整備する経費を補助するものです。

補助の対象は、児童生徒数全体の 3 分の 2 に対しての端末台数の補助が行われます。また、予備機としても一部補助対象となっております。補助の上限は、1 台あたり 4 万 5 千円としております。また、補助の要件として、日常的な利活用計画、残りの 3 分の 1 の端末や予備機等の確実な整備、指導者用の端末の整備等が明記されています。

9 ページをご覧ください。

令和5年6月16日に閣議決定された「教育振興基本計画」では、目標11及び12がGIGAスクール構想の実現に向けた環境整備に該当しています。10ページをご覧ください。

目標11及び12の指標としては、例えば「児童生徒同士がやりとりする場面でのICT機器の活用頻度の増加」や「児童生徒一人一人の特性や理解度・進捗に合わせて課題に取り組む場面でのICT機器の活用頻度の増加」、「ICT機器を活用した授業頻度の増加」などが挙げられています。

このような国の動向を受け、この度、「ネクスト・ギガ・リプレイス意見聴取会」を設置し、各方面からの意見聴取を行っております。それを受け、検討委員会において、枚方市の児童及び生徒に貸与している学習用端末の更新、その他学校教育における情報化の推進について協議し、端末更新に係る仕様に反映するものです。

スライド11枚目から19枚目に関しましては、「令和5年度全国学力・学習状況調査」における1人1台端末の活用状況結果と本市の結果を比較したものです。

グラフについてご説明させていただきます。

11ページをご覧ください。

こちらは、「児童生徒に対して、一人一人に配備されたPC・タブレットなどのICT機器を、授業でどの程度活用しましたか。」という設問に対する結果です。

左側が小学校、右側が中学校の結果です。

一番上の横棒グラフが本市の結果、真ん中が大阪府の公立学校、下が全国の公立学校を示しております。

12ページをご覧ください。

こちらは、先ほどの設問について、政令指定都市と本市の小学校の結果を比較したものです。中学校の結果は13ページに記載しております。

一番右が本市の結果です。また、真ん中の部分を点線で区切ってありますが、左がWindows端末を活用している自治体、真ん中がChromebookを活用している自治体、右側がiPadを活用している自治体です。

14ページは、「児童生徒同士がやりとりする場面で、1人1台に配備されたPC・タブレットなどのICT機器をどの程度活用させていますか。」という設問です。

15ページ・16ページは、設問に対する小学校、中学校の政令指定都市と本市の結果です。

17ページは「児童生徒が自分の特性や理解度・進捗に合わせて課題に取り組む場面では、児童生徒一人一人に配備されたPC・タブレットなどのICT機器をどの程度使用させていますか。」という設問です。

18 ページ・19 ページは、設問に対しての小学校、中学校の政令指定都市と本市の結果です。説明は以上となります。

座長(野中委員) : ありがとうございます。事務局からの説明について、何かご意見・ご質問等ございませんでしょうか。

では、質問がないようですので、報告 2 に入ります。

次に報告 2 「めざす子ども像と 1 人 1 台端末の在り方」について議論する際に必要な視点について、事務局に報告の説明を求めます。

事務局 (浦谷) : それでは、事務局より報告 2 の説明をさせていただきます。

【別紙 4】をご覧ください。

今後、本会議で議論するにあたって、本市の教育理念と教育目標を踏まえ、様々な視点が必要となります。

第 1 回及び第 2 回会議では、1 人 1 台端末が導入されたことによる授業改善や家庭学習に着目した議論、残りの視点については、今後の会議にて議論をしていく方向で考えております。

2 ページ、3 ページをご覧ください。

先ほどご説明しましたスライド資料より授業及び家庭学習での活用事例や活用頻度を抜粋したものを掲載しております。個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実に向けて、【別紙 4】に記載の活用事例や国の調査結果を見る限りでは、子どもたちが 1 人 1 台端末を効果的に活用しながら個人、ペア、グループで課題解決に取り組んでいる様子が見えがええます。しかし、これ以外にも学校現場では様々な活用がされていると教育委員会事務局としては考えております。ぜひ、委員の皆様からは、ここに示されている活用以外に、授業や家庭学習での活用の現状や、今後期待される活用など、ご意見を頂戴できればと考えております。説明は以上となります。

座長(野中委員) : ありがとうございます。事務局からの説明について、何かご意見・ご質問等ございませんでしょうか。

質問がないようですので、ここから案件に移ります。

先ほど事務局より説明がありましたとおり、本会議と次回の会議では、授業改善と家庭学習をテーマに議論を行います。

皆様の活発なご意見をお願いいたします。

ということで、ここから授業改善と家庭学習についてみなさんのご意見等を伺いながら議論を深めていきたいと思っております。今回と次回も同じテーマでということなので、今日両方とも話すというよりは片方だけでも深まったらいいかと考えております。みなさんのご意見次第ということで全く私の質問に対して誰も答えてくれなければ今日の一回で終わり、と、そんなことはないのですけれども、ここからはもう本当にみなさんフラットな立ち位置で思ったことをお話しただけならと思っております。まず

は授業改善についてお話しいただけたらと思っているのですが先ほど頂いた【別紙4】の2ページの下の方から、「どの程度授業で活用しているか」というグラフであったり、あとは「生徒同士がやり取りする場面でどの程度使用していますか」「児童生徒が自分の特性・理解度・適度に合わせて課題に取り組む場面は児童生徒一人ひとりに配備されたPC・タブレット等のICT機器をどの程度使用させていますか」といった項目についてパット見る限り枚方市のタブレット活用はかなり進んでいる方、という見方がされています。それが本当にそうなのかということや、であればどういった活用をしているのかということや、その辺の話を深めていけたらと思っているのですが、みなさんよろしいですか。

でしたらまずは最初に、やはり授業されている先生から具体的なこの数値と現場でのリアルが本当に合っているのかどうかということも含めてお話しいただけたら、と思うのですが、お一人ずつお話を聞いていきたいと思うのですが、山田（大樹）先生、まずは小学校の方で、実際今出ているデータとも合わせて、どのような活用をしているのか、その際先生が工夫している点や子どもたちにどういう人になってほしいか等も含めて簡単にお話をいただければと思いますがいかがですか。

山田大委員：はい、わかりました。まず、この数値はおそらく本校は達成できている数字だと思います。何がこのように数値をあげているかというと、本校はNavimaに力を入れていまして、宿題を出すにしてもNavima、朝学にしてもNavimaを使ったりしていて、Navimaの利用率が小学校の中で開成が一番くらいになっていると思います。

座長(野中委員)：先生、いいですか。Navimaを知らない方もおられるかと思いますが、Navimaについて簡単に説明していただいて、そちらの方が話も分かりやすくなるかと思ひまして。

山田大委員：Navimaは【別紙4】裏面の、活用例、AIドリル、活用左から2つめのものです。

各単元、各学年別でドリルが出題できます。教師側が出したい宿題の課題を選んで子どもたちに配信できる、プラス児童が自分で学年を選んで、さらにそこから自分でドリルを進めていくというようなことをやっています。個別最適化に繋がるが、早く授業の課題が終わった児童などは自然と勝手に子どもたちが始めていくというような授業形態をとっているのが、授業の中でも使用するし、家でも使用するし、子どもが常に触れるような環境になっています。教科については、主要教科はすべて入っています。ここまでは家庭学習も含めてですが、授業での活用はやはりロイロノートを中心に使っています。これが入ったことによって紙ベースで共有がなかなか難しかったんですが、これであれば一括で共有できるので、誰かの考

えを前にでて発表するという機会を設けなくても、自分の席で誰かの意見を見ることができる。その中で発表したい子が前にでて、全体の前で説明できますし、幅が広がったという感じがすごくします。最初の1年目は教員も慣れずいろいろと難しかったし、試行錯誤した上での今3年目であって、本当にいろんな先生が活用しているなという感じます。あとワークシートについてもロイロで作っているので、授業もそれを通して課題解決型学習とか、いろいろと取り組んでいるので、ロイロにとってはやりやすいと感じます。そういうところになります。

座長(野中委員) : ありがとうございます。今のお話に対して質問したいという方はおられますか。

野村委員 : いま、現場としては紙のドリルは買っていないということですか。

山田大委員 : いちおう、漢字ドリル、計算ドリルについてはやっています。

野村委員 : 完全にシフトしたわけでないということですか。

山田大委員 : まだです。ただいま来年度に向けて管理職も含め、ドリルの購入について検討が始まっています。

座長(野中) : いろいろ質問していきましょう。先ほどお話ししていただいた内容で、今回では授業改善のところについて、2つ出てきたのが AI ドリルと、ロイロノートという、先生と生徒が双方向型で、データのやりとりをするといった授業アプリを活用しているというものだったと思います。特に事例としては、子どもたちの解答をつくりながら、みんなで見に行けたりするような話もあったかと思いますが、先ほど事務局の方から ICT の活用について、スライドの4ページ目、1人1台端末で学びが変わりますというものがあります。そこでは1人1台端末を活用して教科の学びを深めるというもの、教科の学びの本質に迫るといものが書かれており、とてもおもしろい言葉だと思いますが、先ほどの内容でいうと、他の人の解答を共有しやすくなったというのは、いろんな人の考えを知ることによって教科の学びを深めるということにつながるかと思いますが、教科の学びの本質に迫るとい点においては、どのような活用をされておられるのでしょうか。いきなり発展しすぎましたか。

山田大委員 : 算数にしても今までであれば、教科書に見本の考え方があって、それをもとに考えていましたが、ロイロなどをつかって課題を投げかけて、子どもたちがそれぞれ考え方を考えていく、そしてそれを共有する、どの考え方がより算数としてやりやすく、簡単で正確なのかをみんなで考えるというのが簡単になったと感じます。それが本質につながるのかはわかりませんが、子どもたちが自分の理解にわかりやすい解き方の定着にはつながるかと思います。

座長(野中委員) : 理解とか知識の定着につながっているということですね。はい、ありがと

うございます。いろんな人にもお話しいたきたいですので、次は中宮中学校、佐納先生、どのような活用をされているのか、また先生以外の方はどのような活用をされているのか、枚方市は使用率が高く、特に協働的な学びにおいて使われているとのことですが、そこもふまえてお話しいたけますか。

佐納委員：私は社会科を担当していますが、授業の中ではほぼ毎回タブレットを使用しておりまして、どういう活用かと言いますと、例えばミライシード、Google スライドで共同編集をしたり、自分の成果物を共有したりという形で、子どもたちに課題を与えて、課題解決に向けて、子どもたちの中で分担させたものを、スライド上で共有したりだとか、担当を分けて提案したり、子どもたちが共同編集だとか共有という形で、ICT を活用しています。紙のときにも同じような形で、個人で書いたものを班で共有したりはしていましたが、ICT 機器が入ったことによって、それが班だけでなくクラス全体、学年全体で共有できるようになりました。そういう意味では協働的な学びというのを、単なる班5人の学びではなくて、より大きい集団での協働的な学びにつなげることができていると思います。他の教科での活用についても、国語であればGoogle スライドを使って章を分けたりだとかして使っています。転勤したばかりなので、他の教科での取り組みは知れていない部分も多いので、今後学んで、この場でお伝えできればと思っています。

座長(野中委員)：はい、ありがとうございます。何か質問したい方、いらっしゃいますか。

上田委員：共同編集というものをもう少し詳しく聞きたいです。

佐納委員：例えば、グーグルスライドで、テーマだけをかいたスライド3、4枚を送って、自由に生徒がそこに書き込んでいく、そして同時に見れるようにしたり、1つの班で協力して作っていくというものもあります。

座長(野中委員)：ありがとうございます。同じテーマを選んだ子ども同士で、共同編集するというものについて、具体的にどんなテーマなんですか。

佐納委員：最近のものであれば、地理の単元で、気候の違いによって、それぞれ人の暮らしが違うわけですが、服装や住居、食べ物が違うが、なぜこのような生活スタイルになっているのか、私は最低限の資料を送って、子どもたちがそれを読み取って、なぜその生活をしているのかについて考えています。なぜ乾燥帯なのに長袖をきているのかだとか。違う単元でも、テーマを同じように分けたりして、ミライシードを使ってカードを配付して、子どもたちの中で共有したりして探したりしながら、同じ資料を見ていると違う視点があるので、そういうことを発見させたりしています。

野村委員：社会科には探究活動も含まれています。今、聞いていて思いましたが、小学校5年生にも同じ単元があります。あたたかい地方、寒い地方。標高の

高いところ、低いところ。たとえば「寒い地方ではどのような暮らしをしているか」ということを、知識を得るのではなく、子どもたちがそれぞれ分担して調べて、お互いに発表します。調べてまとめて伝えるためのスキルを磨くのが社会科です。これは前の学習指導要領からそのように示されていて、すでに始まっていたことです。実際には、先生が一方向的に教えて終わりということが多かったですけど。この5、6年かな。中学の社会科でぼくも佐納先生に授業を見せてもらい、5年くらい（前）もうされていまして、そういうふうに分担して自分で考えてまとめて発表していく。別に寒い地方だけでいいんですよ、自分が分担したら。あたたかい地方を見ていたら、「ああそうか、寒い地方はこうやから、あたたかい地方はこうやねんな」ってわかることもありますけれど、やっぱり『調べ方を学ぶ』っていう単元。社会科って実は、知識もそうですけれど、半分はそういう『調べ方を学ぶ』や『学び方を学ぶ』ということが大事な教科であることが、はっきりと目標にも書いてあります。ですから、そこを中心に、今いろいろな取り組みをしてくれているのだと思います。

座長(野中委員) : なるほど。そういう意味でいうと、その「情報収集、整理、発信」が大事だということだと思えますが、情報収集の仕方自体も、ICT を取り入れることで変わっていたりするのですか？

佐 納 委 員 : だいぶ大きく変わりました。もともと子どもたちは、紙媒体の教科書と資料集を購入してもらっていました。

座長(野中委員) : アナログの時は、ノートにまとめていましたか？

佐 納 委 員 : 以前はノートにまとめていました。教科書、資料集からわかったことや、話し合っただけのことをノートにまとめて、それを共有するというのが一番ベターなやり方でした。私の授業の中では、よくやっていました。最近では、教科書と資料集プラス、確実な情報じゃないものもあるかもしれないのですが、たとえば写真やグラフ、自分が読み取れなかった言葉とか服装をとらえたけれど、これを自分で説明できない時にインターネットで、その言葉を調べたり、キーワードを自分で検索したり、という活用方法で子どもたちには使わせるようになりました。もともとの固定化された情報だけではないので、すごく幅が広がりました。表現するだけでなく、情報収集をするという部分でもかなり大きな発展があったと考えています。

座長(野中委員) : ということは、教科書、資料集はかなりきちんとまとめられていてわかりやすくなっていますが、ただその情報量という観点でいきますと、Web の情報は確かにさっき言われたように信憑性の問題もあるかもしれませんが、情報量は圧倒的に増えます。その面で情報収集の能力が格段に上がるのではないかということですね。なるほどです。

野村委員：小学生だと情報が多すぎて、やはり教科書や資料集でまとめていきます
タブレットでしたら、写真をとれますが、実は小学校もタブレットが学校
に 40 台だった時から、タブレットを使ってまとめさせていました。でも
40 台しか学校にないので、学年で調整しないとできないという問題があり
ました。どうしても連続で使うことが難しいので、画用紙を使って紙芝居
のようにプレゼンテーションをしている先生もけっこういました。でも、
やるところとやらないところの差は、たぶん大きかったと思います。

座長(野中委員)：やるところとやらないところの差とは？

野村委員：学校の差や先生の差のことです。学年でこうしていこうと進めても、先生
が社会科の本来の意味を理解しているかで変わってきます。そういう意味
では、授業改善ができていないかという話になってきます。

座長(野中委員)：今、おっしゃったみたいに、お二人の話を聞いていると、アナログでも授
業でも、子どもたちが自ら学んでいけるような授業設計を取り組まれている
のだろうなということを感じる部分がありました。そこに ICT が入ること
によって、子どもたち全員の回答を共有することで学びが深まったり、
協働的な学びの部分で情報収集を web という手段を取り入れることで格段
に情報収集のスキルが上がったり、そのような ICT を本当の意味で有効活
用していると感じました。しかし、野村先生がおっしゃってくださった
ように、先生たちもまた、アリの社会の「2:8:2の法則」のように、「働
く人」と「中間層」「まったくしない人」のようだと感じました。これって
ICT 活用の部分でも、「とてもうまく活用していける先生たち」「連絡手段
くらいには使おうという先生」「私はチョークと黒板があればみたい先生」
も一定数いるのではないのでしょうか。その肌感覚は、どんな感じなわけ
しょうか。上澄み層のお二人と、そういうのではない方々と。どういう状況
なのか、視野を広げて、お話を聞きたいと思います。

上田先生は管理職で、今、校内の先生たちの授業を見に行く機会がある
と思います。その中でこのお二人のように、本当の意味で ICT を活用した授
業改善をしている先生がどれくらいの割合でいて、もうちょっとがんばっ
てくれよといった先生がどれくらいの割合でいて、実際に実践の差をどん
なところを感じるのかということ、上田先生の視点からお話いただい
たらと思いますけど、いかがでしょうか？

上田委員：そうですね。導入されて最初はなかなか得意という先生よりかは、抵抗感
があった先生が多かったかもしれないです。でも今、私が勤務している学
校は、ほとんど活用という点においては、毎日毎時間、タブレットを活用
しています。

授業改善という視点でいうと、活用というレベルではなく、「深い学びにつ
ながっているのか」「個別最適」「子どもたちの脳が一人ひとりアクティブ

になっているのか」という点の指標で見えていかないといけないかなと感じています。

活用の部分で、枚方市は全国的に見てもかなり高い数値にも表れていますし、私もいろいろな授業観察をする中で、毎時間活用しています。

ただ授業改善の視点で「一人ひとりの脳がアクティブになっているか」については、もっと議論するというか、伸びしろがあるのかなと私自身感じています。

本校では特に総合的な学習の時間にフォーカスしています。

先ほどの別紙3の4ページにある「探究プロセス」という総合的な学習の時間の解説に載っているサイクルがありますが、課題設定、情報収集、情報の整理、表現発表というこの一連のサイクルから子どもたちが想像する、やり切る、練習する、作り出すとか自分で自己決定するというのが、ICTの活用をすることで、より加速していくことができると感じています。教室には、いろいろな子どもがいて、人前で発表することが苦手な子もいれば、自分の主張、手を挙げて発表する子もいます。今までの一斉授業の形から、そういう子でもシェアできます。ある（事例です）が、人前で音読することにもものすごく緊張する、うまくできない子がいましたが、実際おうちで（練習を）やってきて、みんながそれを聞いてフィードバックする、そしてその子が振り返りにこんな意見をもらった（ということがありました）。それって、その子がICT（のおかげ）でフィードバックを受けている。教室の今までの学びから、もっともっと広い世界へ、いざなってくれるというか、それを活用次第ではできると思います。授業改善という視点で本校は、教室だけの学びだけではなく、たとえば枚方市の友好都市の北海道にある（別海町立）野付小学校と学習交流をしたり、沖縄県の名護市（立東江小学校）と学習交流をしたり、カンボジアの現地校と学習交流したりすると、子どもたちは今まで知らなかったことに触れることができました。これはICTを使わないとできないことです。

もちろん教室という空間でも、手を挙げて発表する子の意見だけでなく、一斉に共有することによって「ああ、実は、この子のこういう考えがあったのだな」と先ほどおっしゃってましたけれど、それが協働的な学びの第一歩だとお話を聞いていて思いました。本校では、NavimaのAIドリルも活用しています。この魅力は、自分で決められるというところが、私はすごくいいと思っています。先生から一斉に課題を出す必要な場面はありますが、自分の課題が何で、自分はこれをやるんだという自己決定の繰り返しというのが、（これから）求められていくと感じています。

そして本校は、総合的な学習の時間の最後に、集大成として、自分の探究したことを発信する「東香里TED（とてもええで）」を開催しています。こ

これは子どもたちが聞くのにも時間がかかりますが、動画を入れることによって、(子どもたちもしっかり) 聞いて「この子、こんな発表をしてるんやな」ということをシェアできます。それに対してフィードバックできるというところが、端末を使うことによって、学びががらっと変わりますし、一人一人の脳がアクティブになるのかなと思うところもあります。

先ほど共同編集という点では、私が野付小学校との学習交流で学ぶところがありました。向こうの学校では子どもが自分たちでシートを作り上げていました。「どうやっているんですか」と聞くと、どうしてもワンシートになると「消えたー」とか子どもたちが、せっかく作り上げたのに、なかなか小学生の発達段階で、難しいなあと思いつつも、感じる部分はあったのですけれども。

それを知って子どもたちが「先生これ、北海道の子らつくっててんてー」というのを、だから子どもたちも、それは知らなかった。

自分たちはグループで作っていたので、共同編集を家庭でもやっていたと聞いて、子どもたちに火が着きました。「やりたい、やりたい」ということで、じゃあそれに挑戦してみようか今年はとなりました。

まだ発表はできないですけど、共同編集という点においては、小学校でもまだまだ伸びしろがあると思いつつも、どうしても発達段階によるのかということをお話を聞いていて思いました。活用という点では、どの教室でもできています。

ただそれが「効果的なのか」「深い学びにつながっているのか」。ICT 導入以前の話だと思いつつも、そういう視点ではもっともっと議論できたらと思います。

座長(野中委員) : ありがとうございます。いろんなキーワードがいっぱい出てきたと思います。

子どもたちの授業中、脳がアクティブになっているのか、というのはとてもいい言葉だと思うんですけど。またなおかつ、脳をアクティブにいくために、総合的な学習の時間とかに探究のプロセスを意識して、自己決定できる場を設けている。他にも色々なことをやっていて、枚方市と野付小学校で学習交流をしている、カンボジアとも学習交流をしているとか。自分たちのその一年間の探究したことを発信するような場をつくっていたり。

上田委員 : はい、そうですね。プレゼンテーションをするような場を設定している。

座長(野中委員) : これあの、1個だけ教えてほしいのが、子どもたちの学びが、脳がアクティブになっているかどうかという部分で、学校外、学習交流っていうのは、これはその学校の取り組みとしてやっているのか、いち先生としての取り組みとしてやっているのか、どんな感じなのかな?と。

その学校の取り組みとして ICT を進めている部分と、個の先生たちによって、脳がアクティブになるような活動をされている場面と明らかに両方のさっき話がされていたのではないかと感じたんですけどね。学習交流ってどんな感じなのですか？

上田委員：学習交流は基本的に学年で動いている。最初のスタートはカンボジアの現地交流でした。

枚方市について学ぶことを発信したい。せっかく友好都市があるから学習したことを発信してみようとスタートしたのがきっかけで昨年度始まった。

先生は、生活科で学習した後に、学校なんか発信したい。今年はなことをしたいです、先生たちから（要望が）来る。その学習交流は学年でやっている。

東香里 TED に関しては学校全体でやっている、そんなイメージです。先生たちも、そういう可能性もあるんだ。と知ったら、最終的な何を身につけさせたいかっていうゴールの中に自分で発信とか、アウトプット、ようは自分で作り出す、やりきるっていうのがすごく意識してくれるようになったな、それができるのは、端末のおかげそこがやっぱり授業改善、変わったのかな、教室というどうしても狭い世界、教室というところから壁を越えていってるんだなというのを3年間、私自身は感じています。

座長(野中委員)：なるほど。学校の取り組みとしてはTEDでしたね。その他の授業の部分では「脳がアクティブになっているかどうか」という授業は、いろんな授業を見に行き、「この先生いい授業してるな」というのがあるということと、先生たちが「カンボジアと学習交流したい」と言ってきてくれると、多くの先生が「脳がアクティブになっているような授業にチャレンジをしている環境であるのかな」というのが今聞いていて思いました。

「そういう調整をしている先生」と、「もうちょっとがんばってほしいなという先生」が何対何くらいなのかなや、今、教頭先生が感じて考えてらっしゃる課題感は、どうですか？

上田委員：そうですね。本校は学級数が12学級です。それぞれの学年が2クラスです。全ての学年で総合的な学習の時間を、発信やアクションをやり切ろうというのを昨年度話し合いました。研究が始まったのは3年目ですけど、

座長(野中委員)：学校の取組としてはTED、その他の授業の部分では脳がアクティブになっているかどうか、多分、いろんな授業を見に行き、この先生いい授業してるな、先生たちがカンボジアと学習交流したいんだと言ってきてくれる、多くの先生が脳がアクティブになっているような授業にチャレンジをしているような環境であるのかと聞いていて思いました。

では、挑戦をしている先生ともう少し頑張ってもらいたいという先生は何対

何くらいなのかとか、今の先生が教頭先生として感じてらっしゃる課題感とか、そのあたりどのような感じですか？

上田委員：本校は、学級数が12学級しかないので、正直すべての学年で総合的な学習の時間を発信とかアクションというのを最後やり切ろうというのを、昨年度、研究始まったのは3年目ですけど、昨年度、すべての総合的な学習のカリキュラムを先生たちが創り上げてくれたので、正直、すべての学年でやっています。ただ、私自身が感じている課題感というのは、まだまだ子どもが自分で決めたり、自分でツールを使う、選んだりというのはまだまだ私は課題があると思っています。先生がこのツールを使いなさいと言ってそのツールで自分が学んでいる、そうではなくて6年生くらいになったら自分はこんなことを考えたいから、それに合ったツールを使って学ぶというところまでいけるのではないかと感じる部分もあり、それがどうしても課題の一つです。それも共同編集にもまだまだ可能性があるのではないかとこの点なんですけれど。

もう1点、資料を中学生は資料を見抜くというか、小学生はインターネットから資料を拾ってしまうと本当にこの資料で本当に伝えたいのか?とか、先ほども言いました通り、お互いでフィードバックというか、発表したプレゼンをフィードバック受けると本当にそれでいいのか?その資料間違っていない?と子ども同士の指摘があるので、その視点はよいのかなと思うんですけど、なかなか情報がすごい、ネット上にグラフ、情報があふれているので、その辺は、例えばクラウドに資料集じゃないですけど作ってあげたりだとか、そこはもう発達段階によるかなと思います。

正直小学校6年生でもインターネットからこの資料ってもってきたら、本当にそれでいいの?というのはかなり場面感じます。

座長(野中委員)：なるほど、ありがとうございます。脳がアクティブになっている授業への挑戦はほとんどの先生がやっている。その流れの中で、今後もうちょっとレベルアップしていこうという部分でいうと子どもの主体性を伸ばしていくことにおいて、自己選択・自己決定させるのがものすごく大事であると、その流れの中で、子どもたちが発表する、共有する、共同編集する、ということ自分自身が、先生からこのツールを使って発信してくださいではなくて、発信自体もプレゼンツールはいっぱいありますから、それぞれの特徴を自分たちで押さえて、簡易にプレゼンするならロイロノート、しっかり自分の一年間の学びをちゃんと伝えたいのならキーノートとか、見栄えを、デザイン性を高めていきたいという話ならキャンバとか、自分でツールを選択していける自己選択自己決定していけるような場面をもっと今後うんでいけたらいいなというところと、あとは情報活用能力という点で情報収集してきて、これがあってるのかどうかもとりにあえずわからないけ

れど、「あっこのデータあったからとりあえずはっこう」となってる部分もあるんで、情報活用能力を1から6年生にかけてどのように育てていくのかにもう少し課題感があるかなというところです。

上田委員：そうですね、6年生でそういう姿になってほしい。

座長(野中委員)：6年生でね。

上田委員：自分で選んで自分で決定していくところ、6年生でそういうふうになってほしいと教職員みんなで話をしているのですが、もちろん低学年で自分で選ぶことはなかなか難しいので、それはもちろん教えることも必要ですが、だんだん教わる学びからシフトチェンジしていく、低学年でも小さい自己決定は連続してあるのでそういうのは大事にしてほしいな、ということを感じます。

座長(野中委員)：ありがとうございます。それでは東香里小学校においての、組織としてどのようにICTに取り組んでいるのかというお話を聞かせていただきましたが、もう少し視野を広げていきたいと思うのですが、枚方市全体として小中学校63校ありますので、63校が本当に、東香里小学校のお話をうかがったらとても素晴らしいと思うのですが、63校がそうなっているのかを考えていく必要があるのではないかと思います。

そういう面において野村先生は、iPad導入よりもっと前のPC教室にパソコン整備しようというぐらいの時からICTに関わっていらっしゃるという風に伺っております。今回iPadが2020年度に導入されて、いろいろな学校に回られたと思うんですね。その流れの中で各校がどういう状況なのか、東香里小学校みたいな学校というのは果たしてそのマジョリティなのか、マイノリティなのか、そのへんも含めてざっくりばらんに教えていただけたらと思うのですがいかがですか？

野村委員：僕は25年位くらい前にテレビ会議をしていてあの時はとても苦労してテレビ会議をしてたんですけど今は簡単です。時代が変わったなと思って話を聞いています。実は25年くらい情報教育に関わってきたんですけども、ここ1年半くらい、一時コロナでいろいろな人に会えなかったのが最近会えるようになってきて、僕が枚方ってみんな知ってるから、全国のいろいろな人から「枚方はなんであんな使えるの？中学校なんであんな活用できているの？」と話を振られるんです。そこは研修課に非常勤で来てから8年くらいになるんですけども、佐納さんがそのあとぐらいでしょうか。枚方授業スタンダードが市から言われていましたか？

佐納委員：言われていました。

野村委員：多分そこがスタートです。

端末が入ったから変わったのではなく、既に授業改善をやろうということをやっていたので、それが今までは特に中

学校は高校入試があるから知識をつけないといけない、小学校では教科書を教えなくてはいけない、ある程度知識をつけないといけない、テストで点数を取らさないといけないって、確かに知識がないと考えることができなからそれは必要なのですが、そういうところが違うよねっていうところから枚方授業スタンダードをとりあえず始めました。前から順番にするのではなく逆向き設定をしようとか、先生が教えるのではなく子どもが学ぶところを考えてやっていこうと授業設計の話を研修ですごく打ってきたんです。

小学校は割と変わっていったんです。というのは小学校の授業研究って全教科やっているからどの教科でも一緒なのです、全員が自分ごととして取り組める、中学の場合、教科があるからそこが難しいんです、なかなかそこは、やはり高校入試があるからなかなか進まなかったと思うのですが、そういう意味では小学校も特に指導課が中心になって校内研修なんかにはいっぱい出て行って、ずいぶん授業が変わったと思うんです、あの頃から国語の単元計画を子どもと作って、こういう風に授業を進めていきましょう、そうすれば子どもも授業がどう進んでいくか見えるから、ある程度調べたい子は自分で調べたりそういう学びが進んでいきました。今中学校も多分やっていますよね。社会科。

佐納委員：はい。

野村委員：単元計画を出していますよね。

そのあと中学校が変わりかけたころにちょうど端末がきたんですよね、だから中学校が多分一気に変わったのかと思います。

単元計画がなぜ良いのかというと、子どもがこの先自分がどう学ぶかを子どもが分かっている、小学校以上に、中学校でそれを見ていたら自分はこうしよう、こういう学びなんだとかここはちょっと先に見ておこうとかということが多分家でもできる、言えば予習？復習ではなく予習ができる。そういう意味で中学校の社会科が単元計画を結構出しているという話を聞いていました。そういうところで中学校が変わっていったのだと思います。そして、教科部会をきちんとしていたり、週に1回やっていたりとか、そういう意味では小学校よりも教科の学びが、みんなプロフェッショナルのかたまりだからそういう意味では、研究してこれを使っていこうとか数人が集まって授業はこう進めていこうとか。どうしても1学年を2人でもっていたらやり方も合わせないといけないので「私ようせん」という話にはなりません。中学校の場合も、小学校でも同じ学年で誰かがしたら他の人が「私ようせん」とは言えないです。そういう意味でうまく学年とか、中学では教科で引っ張っていかれたのかなと思います。

資料3の後半に市町村のデータが出ていたでしょう、熊本、新潟、枚方が

突出しています。その中でも枚方は中学校が高い。他は中学校が高いところがないんです。けれども中学校が高いというのはやはり中学校はきちんと教科でまとまってやっているのがすごく出ていると思います。

それはただ僕が実際に見せてもらっているのは、ほとんどは頑張っている学校しか割と見ていないので、その辺でこぼこはどうなっているかの不安はあることはあります。でも実際、こうやって数字が出てきているということは、そんなにやってない学校はないんだろうなと思います。率を出したらもっと下がるはずだから、これだけ高いのはやはりそれなりにきちんといろいろな学校でやってくれているんだろうなという感じを僕は受けました。

特に中学校は、佐納さんが以前第四中学校におられて、iPad が入る前に Windows タブレットが第四中学校に入っていました。多分そのころから実践を始めてくれていて、研究会も中学校は悉皆、で多分みんな行きました。多くの人が、市長が中学校を先にやるとおっしゃったので、みんな見に行つて、ちょうどそのころに GIGA 端末の GIGA スクールの 2019 年、ちょうど GIGA の発表があった年、入ったのが。ちょうどそれと相まって特に中学校は、しないといけないと思ってくれたから授業が変わったのではないかと思いました。小学校の探究的な学びでいうと総合的な学習の時間が探究だけれど、実は教科の学習にも探究が入っています。国語にも説明文があったらその説明文のスキルを使って自分で書こうという単元があったり、こういう発表しますと 4 人で机を合わせて発表資料を作っていきますというスキルが教科書に全部書いてあるんです。それをみんなで何かテーマを決めてやるとか、社会科もさきほど言った、あつたかい地方と寒い地方を調べるといふ実は総合は昔 3 時間から 2 時間に減ったけれど、実は国語なり社会なり算数なり理科なり、全部探究活動が教科の中に入っているの教科でも探究をしなくてはいかん、それで小学校が先に進みました。

けれども中学校は今の教科書にはっきり入っています。地理では今までアメリカ地方だったら 3 時間から 4 時間になって、4 時間目は探究をしなくてはいけませんが、その単元の課題は最初に書いてあります。課題を持ちながら 3 時間勉強して最後にまたその探究の活動をしなくてはいけません。教科書になっているので、指導書見たら時間配分もきちんと書いてあるし、そういう部分では探究的な学びにタブレット端末が使えています。ちょうどいいタイミングで、第四中学校がやりだして、先生方の授業のやり方が変わってきたとことに端末が入ってきたから、自分たちで学ぶ子どもたちが自主的に学べる、発表する、それから協働で何かする、もちろんそれは紙でやったきたことが、端末が入ってきたことですごくやりやすくなったということが大きかったので、変わってきたと思います。そういう

意味では7、8年前授業スタンダードが始まったところから授業改善が進みました。授業改善が進んだから端末が良く使えるようになったと僕は見ていて思いました。端末どう使えばいいのかという実践から抜けられないところが多いですね他の市町村。そこは枚方は違うなと僕は思っています。だから外で聞かれたらいつもそういう話をしています、やはり授業ですね。

座長(野中委員) : なるほど、そしたら残り15分ほど、本当はこの話ってあと5時間くらいしたいですね。いろいろ話は尽きません。今回紙資料で置いている枚方市版ICT教育モデル。これの1ページ目の目次のところ見てもらうと、はじめに枚方市版教育モデル作成の背景とか、子ども力を育むとか大項目があります。実際にどう変わっていかうかというところで、学校が変わる4項目目があります。授業改善、家庭学習をこう変えていきたいと思いますとか、全国学力学習環境調査から子ども支援、家庭連携をどのようにしてきます、働き方改革、業務改善、学校に登校できない児童の学習指導、このようなことについてタブレットが入った2020年度にどういう教育をつくっていきたいか、まとめた資料がこれです。今の流れでいくとこの資料にそって子どもたちの生きる力を育てていきたいと思いますという流れで進んでいます。今回も何回もミーティングをしながらこれのさらにアップデートバージョンが次のリプレイスに向けて、どういう力を育てていけたらいいのかも含めて話ができたらいいと思っています。今現状を聞いていると使う、使わないの話でいうと使っているのが当たり前という話で、各校そういう状況です。しかし、そこから授業改善が進んでいるかどうかの話がでてきています。そこは上田教頭先生の言葉がとても好きで、脳がアクティブになる授業をしているのかという話で、それが本当の意味でどれだけ進んでいるかの話をみなさんともっともっと議論する必要があります。今聞いた話だと、とても枚方市がすごいという話になります。いいところだけ見るのではなく、もっと課題観をすくっていかないとよりよいアップデートバージョンを作っていけません。課題感を今後話できたらいいと思っています。残り10分ですので、オンラインの方からもぜひ話が聞きたいです。不登校支援、特別支援の部分で二人はスペシャリストである伺っています。二人から見て枚方市の学校教育とか、ICTの活用で見えていて具体的にどのように関わり、思っているか、ここは課題ではないか、ここは素晴らしいと思うことを聞かせて欲しいです。

磯崎先生から話してください。

磯崎委員 : ここまでの先生たちの努力によって、子どもたちが定期的にICT機器を使って学んでいることが非常に素晴らしいと思えました。私自身、全国各地の不登校の子どもたちと関わっていますが、やはりそういう子どもたちがタブレットにふれる機会がなかなかないとか、タブレットを最初に一緒に使

ってくれる、導入を手伝ってくれる人が大事だと思います。そこが欠けてしまっていて導入が進まない事例をたくさん伺っていますので、あらためて枚方市さんの取組の先進性を感じております。私が伺いたいことは、脳がアクティブになる、授業中での子どもの様子、ICTを取り入れる目標が、最低限子どもを誰一人取り残さない状態をつくる、その上で学びの本質を学ぶ階層があると思います。まずは誰一人取り残さない状況がどれぐらいできているのか、状態のところですか。そこを伺いながら、枚方市の現状を理解したいと思いました。

座長(野中委員) : ありがとうございます。脳がアクティブになる、言っていたのが誰一人取り残さない、学びの本質を学ぶ、二階層に分かれているのではないかの話で、特に誰一人取り残さない状況が今どれぐらいできているかと思った背景について、もう少し詳しく教えてほしいです。

礒崎委員 : ありがとうございます。まずはICT機器を使うためには、使い方とか使うことでの利便性を子どもたちが理解しないと、使おうとしないし、使わないと思います。子どもたちが活用することができているのは、みなさんがどのような活動をされたかが気になります。活用はしているけれども、実際にあまり使えていない、ログインはしている、画面は見ている、タッチもしているが使えていない子がいる場合、その子どもたちの様子から今後検討していくICTの課題、授業での子どもたちとの関わり方、今後の改善ポイントが見えてくるのではないかと思います。そのような背景から伺いました。

座長(野中委員) : 礒崎先生ありがとうございます。この間違ってとてもよい問いだと私は思っています。誰一人取り残さないがどれだけできているのかという問いに関しては、次回のミーティングでみなさんと話ができればいいなと思います。よろしいですか。今日一人ずつ聞きたいとても良いテーマです。今日の時間では一人しか聞けないので、次回でよろしいでしょうか。

礒崎委員 : よろしくお願ひします。

座長(野中委員) : 事務局にもお願ひですが、誰一人取り残さないという意味で授業だとかICT活用の部分でどのような活用があるのか、市としてどのような施策をしているのか、もしあれば次回まとめてきて、事務局から報告してほしいです。よろしいですか。

事務局(浦谷) : 承知しました。

座長(野中委員) : はい。ありがとうございます。礒崎先生ありがとうございます。
続いて山田先生からもお願ひします。

山田智委員 : ありがとうございます。みなさんの話を聞きながら、改めて枚方は進んでいると実感しました。私は臨床心理士ということで、子どもたちの悩みを聞くとか、上手くいかなかった場面で出会うことが多いので、その観点か

ら色々話を聞いていました。例えば、先程の情報収集がしやすくなる、どの資料がいいのか見極めることがとても難しいです。大人でも難しいと思います。大学でも教えていますが、何か課題を出すと数人同じ文章がでてくる。これ同じ文章からコピーしていることがわかる。最後のまとめで自分の意見がかけられているか私の見るところはそこであり、そこがしっかりかけているかが、学べているか、評価ができるポイントです。例えば、先程の話にもあった共同編集とか、どのような状況になったら、誰一人取り残さず活動して使って、協働学習ができたかどうか、先生たちが見極められているかどうかここが重要です。共同編集にするにあたって先程担当を分けると言っていたと思います。発達課題のある子どもは、積極的に議論に参加するのが難しいことがあります。その場合、その子どもがどの担当になるのか、自分が与えられた担当でずっと同じことをやり続けるのか、それぞれの子どもたちがどのような形でアクティブに動いているか、これはアクティブラーニングと一緒にだと思います。指導者側の見極める力、それからファシリテートする力この両方が重要になってくると思います。指導者がそこをしっかりと見極めて、その力が弱い子どもを引き上げるような、グループでありながらも個別のサポートができていないと、一部の子どもが、能力のある子どもが共同編集しました、形として一見きれいにまとまりました。上手くいきましたとなりかねません。時々、不登校、発達障害の子どももそのような授業を嫌がる場合があります。それは、自分たちがしっかりと参加している感覚が持てないからです。難しいし、みんなの中でディスカッションするのにこれ以上自分の意見を述べることができないうので疎外感を感じている可能性もあります。そのように考えると次回のテーマであります、いろいろな力をもった子どもを例えば ICT 機器を使って共同編集をして考える力をつけさせるとすれば、先生たちがどのような指導が必要か、どのようなアセスメントをする力が必要か、大きな課題になると思います。情報をみんなが発表しなくても見られると言っていました、読む力が苦手な子どもは、みんなの意見がたくさん出ていても読めません。たぶん見ないと思います。そのような子どもにとってその時間はどのような学びになるのでしょうか。そのことも含めて、枚方は使っていると思います。この iPad が配付された頃は、子どもたちも相談室に持ってきて大好きなアーティスト写真が見れることに喜んでいました。今は上手く編集できないという悩みに変わっています。確実にステップアップしていますが、それを考える力、生きていく力につなげていくためには、どのような活用法とどのような指導法と先生のアセスメント力が必要か、ファシリテートする力も含めて私はとても関心を持っています。以上です。

座長(野中委員)：ありがとうございます。大変すばらしい次回に続くお話をしていただき、

感謝申し上げます。課題も出してくださっていると思います。

個の特徴に応じたようなプロジェクト型の授業だったら、共同編集するときに担当の割り振りができているのかというところから、もう少し広げた、個性に応じて授業設計がどれだけできているのかとか、どういう視点において、授業設計しているのかなどももう少し具体化していけると今後より良い活用の仕方とか子どもたちをよりよく育てていくことにつながっていくのではないかと思います。そういったお話と考える力を身につけるためにどのような観点で物事を考えていかないとか、そういう力を身につけていかないといけないのかという話もしていただいたと思うのですけれど、次回この点について話してみたいと思います。どちらにしましょうか。個の力に応じた授業の部分か考える力を身につけるためにという部分とどちらにしましょうか。

山田先生、どうですか。

山田 智 委員：どちらでもいいのですが、今やはり1人も取り残さないというお話からつながっていると思うので、最初のほうのテーマですよね。そのほうがいいのではないかと思います。

座長(野中委員)：わかりました。ありがとうございます。それでは今いろいろなお話をみなさん話していただいて、今日は授業改善についてざっくばらんに話しましょうというところで、まずは学校の先生方がお二人来ていただいているので、自分自身がどのように考えて、どのような授業にチャレンジしているのかというお話をしていただいていたうえで、もう少し範囲を広げて、学校としてどのように取り組んでいるのか、学校の中での各先生方の状況というものがどういう感じなのかということを上田先生のほうからお話いただきました。また枚方市全体としてはどうなのかということも野村先生からお話していただきました。そして、もう少し新たな切り口が欲しいというところで山田智子先生と磯崎先生からお話いただきました。

その中で、次回に向けての話したいテーマ、授業改善としての新たな切り口は誰一人取り残さないというのがどれだけできているのかというところと個の特徴に応じた授業をどれだけできているのか、また個の特徴に応じた授業でどういう視点があるのか、そういうところをお話できればと思います。ぜひみなさんこの2つのテーマに関しては、自分自身もしくは校内の先生たち含めて情報を集めておいていただけるといいかなと思っています。事務局側もこの2点に関しては、もし出せる資料がありましたら、次回報告いただけたらと思います。

また、今回は家庭学習の部分も話を深めていきたいと思っています。

なので、家庭学習のやり方だけではなく、あり方を考え直す必要があるのではないかと思います。本当にみんな一律同じ課題を家でやってくる

のがいいのかどうか、そこも含めてもう少しお話しできたらいいと思っていますので、そこもまた資料が用意できそうなら、もしくは情報だけでも良いので、集めていただけたらと思っています。

時間になりましたので、このあたりで何かなければ、と思うのですけれども、何かほかにご意見等ございますでしょうか。

改めて申し上げますが、ICT の使い方がどうだというのは切り口の一つであり、タブレットをリプレイスして買い替えるというのはものすごく大きなお金が動きますので、きちんとした利活用の部分を考えていくのはもちろん大事なのですけれども、それをただ使えばいいという話ではなくて、子どもたちがより成長する。枚方市の話でいうとやはり子どもたちの可能性が広がっていく、夢とか志を見つけられるような教育であったり、枚方市でいうと5C、クリエイティビティとかクリティカルシンキング、その子どもの非認知能力を伸ばすためにどのような教育をしていくのか、そこにICTをどのようにかかわれるのか、そういうところを何回も何回も回しながら、切り口を変えながら話し合っていきますので、本質を一緒に見極めながらやっていきたいと考えています。

それでは、質問がありませんので、この辺りで終わりたいと思いますが、本日の意見を事務局にまとめていただき、次回の意見聴取会にまとめていきたいと思っています。

それでは、その他のことについて事務局から何かありますでしょうか。

事務局（浦谷）：今後の聴取会ですが、本日を除いて今年度中に5回の開催を予定しています。

来年度も継続して行い、いただいたご意見等を集約したうえで、1人1台端末の円滑な更新及び今後の利活用計画等に反映していきたいと考えています。

なお、本日の案件に対するご意見についてですが、限られた時間の中で、多くの資料をご覧いただきましたので、会議終了後になって更にご意見や、疑問等が生じる場合もあるかと存じます。会議終了後にお気づきの点等がございましたら、令和5年10月18日までに教育研修課へご連絡いただきますようお願いいたします。加えて、後日、会議録作成にあたり、それぞれ内容確認をさせていただきますので、よろしくお願ひします。

次回の会議は、令和5年11月17日を予定しております。

以上でございます。

座長（野中委員）：はい、ありがとうございます。

それでは、本日の次第は全て終了しました。

ひとつ言い忘れていたのですが、今日お話しいただいた学校の先生側の

視点であったり、外部人材としてかかわっていただいている方の視点からも お話しいただきましたが、今後、実際に子どもたちはどう感じているのか。保護者はどう感じているのか、そういったいろいろな視点からの授業改善であったり、家庭学習であったり、その他の部分の話を深めていけたらいいと思っています。

これをもって令和5年度第1回ネクスト・ギガ・リプレイス意見聴取会を閉会します。みなさま、ありがとうございました。